

# ふつうに同級生

普通学級への就学を希望する障害児が増え、小中学校では門戸が広がりつつある。だが一方

で、授業についていけず取り残されたままにたっているケースも少なくない。「どうせできない」「無理はさせないように」と、これまで後回しにされがちだった障害児の学力。それを子どもたちのニーズとペースに合う指導で伸ばそうという試みが、親や教育関係者らを中心に始まっている。(平塚 史歩)

火曜日の午後3時過ぎ、福岡県内に住むヨウコさん(40)の自宅は「ここに教室」に早変わりする。

タイトルや積み木を使い、計算の仕組みを目で見、手で操作しながら理解する「水道方式」の算数塾。生徒はヨウコさんの長男のタカシくん(7)を含め、幼稚園児の4人だ。

あいさつに続いてそれぞれにプリントを配る。タカシくんのプリントにはカバの絵。「何頭いるかな、同じ数だけ置いて」と積み木を渡すと、「いち、に、さん」。声を出しながら数を数えていく。

自閉症のタカシくんは来春、普通学級に進学する予定だ。小学校に入る前に少しでも学ぶ力をつけたいという思い、ヨウコさんは通信教育を受けて塾を開く資格を取った。タカシくんが生まれる前、小学校で教えていた経験をもつヨウコさんは「タカシの場合、40人学級の二斉授業についていくのは難しいでしょう。でも、学校の中でできる対応には限界があるところも分か

## 障害児に合わせ学力伸ばす

っています」という。親子2人で勉強するよりも、多くの子どもたちと一緒にの方が学習する環境をつくりやすいと、近所の子どもたちにも呼びかけて、昨年10月に塾を始めた。マンツーマンの学習は、一人ひとりの違うペースで進められる。「視覚に訴える部分が多いので、障害のある子どもにも分かりやすいのでは」とヨウコさん。「学校の先生にはまず子どものごことを理解して欲しい。学力はこちらで補うしかないかなと思っています」



「水道方式」は東京工業大教授だった数学者、遠山啓氏(故人)のグループが開発、60年代以降、全国に広めた。障害児の学習に適しているともみる教育関係者は多い。

## 学習法を実践／親が勉強会

10年以上前からこの方式による算数塾を開いている福岡市の須川久子さん(58)も、これまでに自閉症や学習障害の子ら4〜5人を教えた経験を持つ。「楽しみながら自分の手を動かして理解していくことで、少しずつでも前進できます」と話す。

「東京や大阪には、障害のある子どもたちを集めて教えるグループもあるようですが、九州ではそこまで広まっています」。そこで普及の一助にと、福岡県内の障害児の親の会にも呼びかけて、5月に「お母さんの算数教室」を開くことにしている。

普通学級への進学を求めたり、居場所づくりをしたりしてきた親や支援者の間からも、学ぶ権利や学力を保障しようという声が上がりに始めている。

那覇市で今月2日、「発達障害をもつ子どもと家族の願いをかなえる会」(かえるの会)が勉強会を開いた。

講師は、東京で知的障害や学習障害のある子どもたちを指導する「遠山真学塾」主宰の小笠敷さん(61)。「子どもたちは学び

たがっているのに、障害児進学する予定だ。しかし、授業についていけない場合の配慮は沖縄ではまだほとんどない、という。代表で作業療法士の小浜ゆかりさん(38)は「障害の有無にかかわらずその子らしさを伸ばしてあげたい」と話す。今後、会の活動の中に障害児の学びの場づくりを位置づけたいと考えている。

「文中、カタカナの名前は仮名です。」

自宅で開く塾でマンツーマンの指導をする須川久子さん。「障害の有無にかかわらず自分のペースで学べるのがいい」＝福岡市で